



TITLE:

アフリカ地域研究の手法

AUTHOR(S):

田中, 二郎; 高村, 泰雄; 重田, 眞義; 松田, 素二

CITATION:

田中, 二郎 ...[et al]. アフリカ地域研究の手法. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ: 総合的地域研究の手法確立: 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1994, 1: 125-136

ISSUE DATE:

1994-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187399>

RIGHT:

アフリカ地域研究の手法

1. 研究組織

研究代表者：田中 二郎（京都大学アフリカ地域研究センター・教授）

研究分担者：高村 泰雄（京都大学アフリカ地域研究センター・教授）

重田 眞義（京都大学アフリカ地域研究センター・助手）

松田 素二（京都大学文学部・助教授）

2. 研究のねらい・目的

(1) 研究目的

アフリカは、熱帯多雨林、乾燥疎開林、サバンナ、山地林、スワンプ、砂漠などきわめて多様な環境からなる広大な大陸である。この大陸に住む人びとは、多様な環境に対応して、狩猟採集、農耕、牧畜など、自然に強く依存した生活を営み、800を越す民族集団を形成しつつも、相互に多面的な関係を保って共存してきた。社会編成もまた、バンド、村落連合、首長国、王国、帝国など多彩であり、それらの社会が長く同時的に存在してきた歴史をもっている。

しかし、16世紀以来、300年にもおよぶ奴隷貿易の時代、およびそれに続く植民地時代を経て、アフリカ社会は著しい変貌を余儀なくされた。そしてアフリカ諸国家は、植民地時代の負の遺産を抱えつつも、新興の意気に燃えて国民国家の形成と近代化への道を選択した。しかし、1970年代には経済危機に揺り動かされ、1980年代には干魃と飢饉にみまわれるなど、人びとは生存の危機をも含む種々な困難に直面した。そして現在、東西冷戦の終結や社会主義国家の崩壊など世界史的な転換期にあって、アフリカ諸国は、経済の自由化、多党化による政治の民主化などの潮流の中で新たな再生の道を模索しつつある。

本研究の目的は、過去30年間におよぶ生態人類学的現地調査の成果と経験から学びとった「ローカルな地域住民の視点」と「生態学の方法論」を用い、独自性と多様性を持ちつつ変動するアフリカ諸地域の個性と、それぞれの地域社会に通底するアフリカ的特性を、環境、生業、経済、文化、政治などの相互作用の展開として解明することにある。それはとりもなおさず、砂漠化、森林破壊、食糧問題、人口問題、貧困、都市問題など、現代アフリカがかかえる緊急の諸問題に対して、アフリカのもつ潜在力と可能性を地域を原点として再検討することであり、同時に、転換期における世界の中のアフリカ地域の新たな位置づけを考究することにほかない。

(2) 対象と研究のすすめかたについて

初年度の対象としてはボツワナの狩猟採集民サン、ザンビアの焼畑農耕民ベンバ、ケニア北

部の牧畜民トゥルカナ、エチオピア西南部の農耕民アリ、およびナイロビ市内の都市生活者について、各分担者が長年にわたって蓄積してきた現地調査による一次資料をもちより、環境、生業、経済、文化、社会、政治などの各項目ごとに整理を進めることとした。狩猟採集民、牧畜民、農耕民については、それぞれの環境に対応した生業様式や政治・経済システム、生活世界をとりまく自然への認知体系、価値観の異同を比較検討し、伝統的な各地域社会の個別性と多様性を正確に把握、分析したうえで、それぞれの地域社会に通底するアフリカ的特性を抽出するようにつとめた。

アフリカの都市生活者は、地域の農村や牧畜社会とのつながりを緊密に保ちながら出身地域ごとに集団を形成し、集住している場合が多くみられる。そうした人びとを対象として、集団間の社会制度や文化、世界観の異同をひとつの都市空間の中で比較することは、異民族集団の比較検討のための一つのモデル・ケースとなりうると考えられた。

上に述べたような二つのアプローチから、地方の伝統的生活様式と都市生活との連続面と断絶面を見極めることにより、原型的な地方特性およびアフリカの都市文化の特色を鮮明にすることをめざした。

代表者および分担者は、後述するようにそれぞれ国際学術研究（学術調査）の分担者として現地調査に赴き、上記の研究によって明らかになった問題点を補う資料を収集し、本研究の充実を図るようにつとめた。

(3) 研究実施の背景

わが国のアフリカに関する研究は、1958年以来の霊長類の社会生態学的研究にはじまり、民族学、形質人類学、地質鉱物学、地球科学、動物生態学、医学、薬学、地理学、経済学、政治学、文学、言語学、農学と幅広い分野にまたがって展開され、多くの蓄積がなされてきた。しかしながら、このような研究は、特定分野の外国研究である場合が多く、個々の研究自体がアフリカ地域を全体として理解するための地域研究に直接寄与していないものも少なくない。

京都大学では、アフリカ地域がもつ大きな特徴のひとつとして、人びとの生活や文化が熱帯アフリカの多様な自然と緊密に関わりをもって成立している点に注目し、人間と自然との相互関係を広義の生態学の視点から明らかにするため、東・南・中央アフリカの各地で営まれる諸民族の生活を対象として生態人類学的研究を進めてきた。京都大学アフリカ地域研究センターは、このような京都大学のアフリカ研究の伝統の上にたって設立され、以来7年間、自然・ヒト・文化を3本の柱とし、上述の生態人類学的手法に加えて、農学、生態学、歴史学、先史学、政治経済学など、人文科学、社会科学、自然科学各分野の協力を求めて、それぞれの地域をよ

り正確に理解するための努力を重ねてきた。

(4) 研究の目標とねらい

このようなアフリカ研究の経緯をふまえて、本研究では、従来、個々の地域や民族集団ごとに分析されてきた知見を総合し、熱帯アフリカの全域を網羅することによって、各地域社会に通底するアフリカ的特性を抽出することを目指した。

たとえばアフリカというひとつの地域は、単独で成り立ちうるものではなく、外部世界との関係の中での単位を構成しており、その関係は近年ますます密に複雑になってきている。しかしながら、アフリカ地域と他地域との相互連関あるいはアフリカ地域の近代文明からのインパクトとそれへの対応を明らかにし、世界の中のアフリカ地域を正確に定位する際にも、アフリカ地域の固有の論理と特性を理解することは今後何よりも肝要である。

南北問題に象徴される今日の世界状況の中で、熱帯アフリカをはじめとするもっとも脆弱な部分にゆがみが生じ、大きな矛盾が噴出しているが、世界史的な転換期の中において、こうした地域の矛盾を解消し、21世紀の地域のあり方を展望することも地域研究に託された大きな課題であろう。開発等の現代的諸課題への取り組みを考えるに際しても、国際的な政治力学や世界経済システムへの対応をも一方では検討する必要がある。しかしながら、そうした国際レベル、国家レベルの構想の中では、地域レベルもしくは言いかえるならば具体的な個々人のレベルの視点はえてして脱落しがちである。真に重要なことは、現実には生きている一般の人びとが心身ともに健やかに、かつ安心して暮らしてゆける社会のあり方を探究することである。本研究の基本的座標は、村や町といった日常生活世界の中の人びとの生活や文化、社会といったローカルな視点と、自然と対話し、巧みに自然と共生してきた人びとの長年にわたる叡智を多面的に解明するための生態学的手法を最大限重視し、アフリカ地域研究の手法の確立を目指すものであり、この目的が達成されるならば、21世紀のよりよきアフリカ像を模索するための有効な基礎資料を得ることが期待される。

3. 平成5年度の研究経過

(1) 研究会

今年度は3回の研究会を開催した。

i) 第1回研究会

開催日：1993年7月7日（水）

開催場所：京都大学アフリカ地域研究センター旧館2階演習室

出席者：アフリカ地域研究センター所員全員および研究分担者（合計 9 名）

テーマ：「アフリカのコンフィギュレーションを求めて：地域研究とはなにか」

研究計画の概要について代表者からの説明のあと、参加者が本研究に対する期待と抱負をのべた。

いわゆる「地域」の概念の異同に対して、多くの参加者から問題提起があった。従来の、政治的あるいは外挿的な定義によって「地域」を措定する様々な視座を考慮に入れながら、本研究では人類学的なフィールドワークの特質を生かしたローカルな視点から「地域」をみるまなざしを重視するという点が強調された。

研究分担者が担当する地域以外のところ、すなわち西アフリカを対象とする研究にも視野を広げる意味から、分担者以外の参加者を次回以降の研究会に招くことが提案された。生態人類学的手法においてしばしば弱点であるとされる歴史的視点を、アフリカ地域の研究においても明確化する必要があることが強調された。

あわせて、研究分担者からの作業の進み具合の報告と今後の日程調整をおこなった。

ii) 第 2 回研究会

開催日：1994 年 1 月 26 日（水）

開催場所：京都大学アフリカ地域研究センター新館 5 階演習室

出席者：アフリカ地域研究センター所員・大学院生、および研究分担者・招待報告者
・コメンテーター（合計 17 名）

テーマ：「アフリカ地域研究の手法と歴史的視点：東・西アフリカの事例から」

第 2 回研究会は以下の 2 人の講演者を招いて、「歴史的視点」をキーワードにおこなわれた。

竹沢尚一郎（九州大学文学部） 「歴史の中の生業と社会——西アフリカの一漁民社会の『形成』」

富永智津子（宮城学院女子大学） 「東アフリカの女性と文化——ザンジバルの成女儀礼と・踊り・歌」

コメンテーター：赤坂 賢（富山大学）、小川 了（精華大学）、嶋田義仁（静岡大学）

〔研究発表要旨〕

竹沢尚一郎

ニジェール川中流域の、ニジェール川内陸三角州と呼ばれる地域は歴史的・社会的・経済的複雑性をもっている。年に一度、ニジェール川の水が大きく氾濫するこの地域は、アフリカ稲（オリザ・グラベリマ）の原産地と推定されるほか、漁民ボゾ、牛牧民フルベ、米作民マルカ、

畑作民バンバラ等の生業を異にする集団が「棲み分け」しており、それらのあいだに古くから商業と都市が発達した。またこの地域は、世界史的に重要であった金の産地に近かったため地中海世界との交易が盛んであり、7世紀以降16世紀までガーナ、マリ、ガオ等の大帝国の経済的基盤となったことなどから、黒人アフリカの中では例外的に豊かな歴史資料をもっている。

発表の目的は、この地域を本拠とする漁民社会がどのようにして現在の形をとるにいたったかを、それらの歴史資料をはじめ、口頭伝承や社会組織の比較等の手段を通じて再現することにあった。その過程で、この社会がさまざまな条件（生態学的条件への適応とその活用、生業を異にする他集団との相互関係、交易都市を通して与えられる外部からの影響、広域支配国家や植民地行政からの圧力とそれへの抵抗等）を変数としながら、それをみずからのイニシアチブで組み替えることにより独自の特徴ある社会を形成してきたことが明らかになった。今後は、この地域の他の社会を専門とする研究者と協力しながら、同一の条件の中でどのようにして諸社会の差異が生まれてきたのかを考えることが課題である。

一方、この社会に特有な「歴史」意識についても、ペーパーを配布することで問題を提起した。文字をもたず、国家をもたなかった彼らの社会において、何が、どのように記憶されてきたのか。その中心になるのは、さまざまな次元の集団を他から識別するための出来事の継起であるが、それを歴史と呼ぶことが許されるなら、その歴史は西洋的なそれとも、中国的なそれとも異質なものである。

〔参考文献：竹沢尚一郎「神話から歴史へ」『哲学年報』50：39-75〕

富永智津子

本報告は、1993年3月、モンバサとならぶスワヒリ社会の中心地ザンジバルで行なった女性文化に関する聞き取り調査の結果を、すでに発表されている文献によって補足しながらまとめたものである。

調査の目的は、ザンジバル島において女性が果たしてきた文化的役割を解明する手掛かりを探ることにあった。調査の対象としたのは、かつて、結婚式や祝日に催されていた歌と踊りのグループ「レレママ」と成女儀礼「ウニャゴ」、そして現在、ザンジバル音楽の代表格となっている「タアラブ」である。その結果、以下の4点が論点として浮上してきた。

1. ザンジバルにおけるレレママの歴史と機能
2. 成女儀礼ウニャゴの歴史と現在
3. タアラブのスワヒリ化と女性の役割
4. レレママ・ウニャゴ・タアラブの相互関連

この4つの論点を通して浮かび上がってきたことは、ザンジバルの女性はレレママとウニャゴとタアラブという儀礼や踊りや歌の諸要素を取捨選択したり混合したりすることによって、さまざまなヴァリエーションを創出してきたということである。このことが、ザンジバル社会の構造や機能の変化とどのような関連をもってきたのか。これを明らかにすることによって、ザンジバル女性がザンジバルの文化の形成と展開にいかなる役割を果たしてきたかが考察できるのではないかというのが今回の調査で得た手掛かりであった。

イスラームという「表文化」から排除されてきたスワヒリ社会の女性が、女性ならではの文化をその背後で形成展開してきた経緯は、単にイスラーム社会における「裏文化」の問題にとどまらず、スワヒリ社会の捉え方の問題とも密接な関連を持つと考えている。

〔参考文献：富永智津子「ザンジバルの女性と文化——成女儀礼・踊りと歌」『宮城学院大学研究紀要』pp. 1-28〕

iii) 第3回研究会

開催日：1994年2月10日（木）

開催場所：京都大学アフリカ地域研究センター新館5階演習室

出席者：アフリカ地域研究センター所員・大学院生、および研究分担者（合計14名）

テーマ：「生態人類学と地域研究」

報告者：掛谷誠（京都大学アフリカ地域研究センター）

演題：「アフリカにおける地域性の形成をめぐる」

長年にわたるアフリカでの生態人類学的研究の蓄積の成果は、結果としてアフリカの生態史を克明に跡づけてきたといえる。最近、相次いで報告されている生業としての「伝統」農業の急激な変容と農民社会の政治・経済的变化をふまえて、報告者はタンザニアおよびザンビアにおける長期の参与観察の結果から、研究者が「対象」の変化をどのようにとらえ、どのように対峙すべきか、という根源的な問いかけに答える方法を模索してきた。まず、報告者はアフリカの自然・生業・民族を概観した上で、その多様性を指摘した。特に、バントゥ語系諸民族の形成と移動の例をひきながら、生業や言語だけでなく、社会の編成や統合の形態も多様であることを確認する。また、報告者が長年にわたって調査をおこなっている乾燥疎開林帯に生活するトングゥエとベンバの事例から、彼らが他民族や長距離交易を媒介とした外文明との動的な関係の歴史を背景としつつ、それぞれの民族がその地に適応した生業様式・社会・文化をつくりあげて、独自の「風土」を形成してきたことを指摘した。彼らの特性を自然利用のジェネラリストによるエクステンシブな生活様式と総括した上で、彼らの生きる「地域」の特質を

多様な色合いを持った「小世界の流動的共存空間」と位置づけた。こうした空間の存在様式は、報告者によれば、「歴史の中に現れた重要な領域」、「それ自体が意味のある地域単位」として範域を設定する思考法とはなじみにくい、と考えられるという。

動態としての「伝統」をどのようにとらえるかという問題に関しては、ベンバのファーム農耕とチテメネ・システムの変容の事例と現在タンザニア南部で計画中の在来農業の総合的研究の概要が提示された。

〔参考文献・資料：今西錦司「アフリカ研究序説」今西・梅棹編『アフリカ社会の研究』1968、ウォーラスティン（講演）「リベラリズムの苦悶——進歩への希望を何につなぐか」1993. 12. 7〕

(2) 関連国内調査

重田眞義：1993年8月、エチオピア産バショウ科有用植物エンセーテと沖縄産イトバショウの比較民俗植物学的研究〔科学研究費一般研究(c)(研究代表者：掛谷誠)による〕

(3) 関連海外調査

田中二郎：1993年7月～9月、ボツワナ、ナミビア（委任経理金）

高村泰雄：1993年5月、ザンビア（科学研究費国際学術研究）、同年7月～9月、タンザニア（国際協力事業団専門家派遣）

松田素二：1993年9月、ケニア、ウガンダ（科学研究費国際学術研究）

重田眞義：1993年12月、エチオピア（京都大学後援会派遣）

4. 研究の成果とフロンティア

狩猟採集民に関する研究は、カラハリのサンについては1966年より、コンゴ森林のピグミーについては1972年より継続的に行ってきた。両者に関してこれまで得られてきた知見を総合し比較検討を行った結果、オープンランド・ハンターであるサンとフォーレスト・ハンターであるピグミーのあいだには、狩猟方法、物質文化の素材、社会構成の緊密度、テリトリー性の有無など、対照的な自然環境条件への生態学的な適応という観点から理解できる明瞭な差異が指摘できる一方で、植物性食物が安定した食生活の基盤となっている点、比較的短時間の労働によって生活が支えられている点、移動性が高く、流動的な集団編成が苛酷な環境への社会的レベルでの適応として捉えられる点など、狩猟採集という生活様式に必然的に付随すると思われる共通の特徴があることが明瞭に指摘できることが確認された。

1980年代以降には、エスノサイエンスの手法による自然の認知体系と世界観の解明、平等主

義社会の行動学的解析など狩猟採集社会の本質を解明する研究をおこなってきたが、それに並行して、近代化にともなう定住化政策などによって激変しつつある狩猟採集社会の変容過程の分析をおこなってきた。

焼畑農耕民については、タンザニア西部のトングウェが1971年より、コンゴ森林のモンゴ系農耕諸民族、テンボ、レッセなどが1974年より、またザンビアのベンバが1983年より継続的に調査されてきた。

ミオンボ・ウッドランド帯に住むトングウェの生業経済にみられる特徴は、最小努力によって生計を維持しようとする傾向性と、頻繁な集落間の往来や相互扶助システムによって食物が平均化されることである。このふたつの相関する特徴は、厳しい環境と低人口密度に対する適応の要となっている。また、こうした特性を維持していくことは彼らの行動基準として道徳律の基底を形成し、多彩な超自然的世界とも深く関わっていることが明らかになった。

ザンビアのミオンボ・ウッドランド帯のベンバではチテメネ・システムと呼ばれる特異な焼畑が営まれているが、現金収入を目的としたトウモロコシ栽培の導入や、人口増加と集住化という条件のもとで、チテメネ・システムの存続が可能かどうかといった今日的課題を、生態人類学と農業生態学の両面から検討をおこなった。

ザイルやコンゴの熱帯降雨林に住む農耕諸民族もまた、焼畑を主生業としながら、狩猟・採集や漁撈をも大きくとりいれ、自然に強く依存した自給自足的な生活を営んでいる。とくに森林帯では蛋白質の補給手段として狩猟や漁撈の重要性が高く、民族ごとに猟法、漁法が複雑に分化・発展している点などが指摘された。

牧畜民については1974年以来、北部ケニアの乾燥地帯に住むレンディーレ、トゥルカナ、ポコット、チャムス、ガブラなどの研究を進めてきた。農耕や狩猟採集といった生業が成りたらない乾燥地域において、牧畜民は、直接には利用できない野生植物を、家畜を媒介にして肉や乳などに変換することによって、この地域への生態学的な適応を遂げている。こうした存在形態を成立させるための条件となっているのは、移動性が高く可塑性に富む社会集団を編成すること、家畜を含む自然界についての精細な知識をもつこと、家畜の頻繁な贈与交換によって社会関係が維持されることなどである点が克明に探究されてきた。

京都大学を中心とする自然社会の生態人類学的研究においては、その初期には生業様式の記載と分析をとおして自然と人間のかかわりを追求することを主軸にしたが、次の段階では集団の編成や社会構造、社会行動、エスノサイエンスの手法による自然の認知や生活世界の認識、超自然的な観念世界、集団間・民族間の接触と交流などの広い領域をカバーする研究が行われ

ている。近年にいたっては、外文明の圧力下での伝統の持続と変容、農村から都市への人口流出の問題等の現在的課題に、アフリカの各地においてとりくんできた。

本計画は、このような従来の研究成果の整理・統合と再構成を行った上でさらに総合的分析をおこなって、そのなかからあらたな地域研究の手法を創出しようとするものであった。しかしながら、その試みは未だ端緒についたばかりで、前途には多難な数々の関門が残されているようである。ここで、そのフロンティアをいくつか指摘するとすれば、以下の点があげられるであろう。

1. そもそも、アフリカにおいて、一義的に意味のある空間として決定できる「地域」は存在するのかという疑問。
2. 研究対象とその分析の単位として特定の「地域」を仮定し、またそれに見合う形の手法を開発することの根拠と妥当性。
3. アフリカン・ナショナリズム、汎アフリカ主義、部族主義などの範疇化に対するアフリカ人の側からの発言、あるいはバンツー、ナイロート、スワヒリといった区分、サヘル、スーダン、アザニア、エチオピアなどの呼称など、現在の国家の枠組みを越えたあらゆる範疇化に対して検討を加えること。

5. 今後の課題

初年度（平成5年度）の研究の深化をはかるために、前年度にひきつづき、人類学、社会学、考古学、地理学、農学、経済学、政治学、動物学、植物学などの専門家の協力を得て、研究会を開催し、アフリカの地域特性を可能なかぎり模索し、転換期における世界の中のアフリカの位置づけを行い、将来のアフリカ像を検討することを課題とする。

以下のテーマで研究会を開催する予定である。

- アフリカにおける「地域」概念の検討：生態圏・文化圏・政治圏・経済圏
- 都市のアフリカ人における地域意識と帰属意識
- 新たなアフリカ地域研究の視座を求めて

初年度に引き続き個別の資料整理も継続しておこなう。狩猟採集民については、ザイールやコンゴのピグミー、タンザニアのハッザ、農耕民については、タンザニアのトングウェ、ザイールのモンゴ系諸民族、コンゴのボンドンゴ、牧畜民については、ケニアのレンディーレ、カブラ、エチオピアのボディ、都市生活者についてはタンザニアのダルエスサラーム、モロゴロ、ウジジなどに関して、現地調査に基づく資料を追加して比較分析を行う。

また、独立以後30年を経た諸民族の歴史的な動態過程を、野外調査による一次資料や統計資料などを用いて再構成する。急速に加速する外文明の影響力に対して、伝統的な生活様式や価値観はある部分では根強く生き残ったが、他方では「近代化」の名のもとに大きく変容した部分もあった。そして現在のアフリカ諸国は、経済の二重構造、新旧価値観の相克、国家体制と部族主義といったさまざまな形での矛盾をはらむに至ったが、こうした変容と伝統の持続の様相を地域社会ごとに克明に分析し、21世紀の望まれるアフリカ社会のあり方を展望するための基礎的資料とする。

平成6年度以降にも代表者、分担者は国際学術研究等により短期間現地に赴き、必要な一次資料の収集とより現在の問題点の発掘を行う。

研究の成果は、アフリカ地域研究センターの機関誌 *African Study Monographs* に英文で出版する予定である。

6. 研究業績（平成5年度発表分）

田中二郎

「アフリカ伝統社会の持続と変容」『海外の学術調査 2 ; 2 : 中東・アフリカの自然と文化』日本学術振興会, pp. 21-36, 1993.

「新・民族ルネサンス ; サン」『京都新聞』1993年6月24日号第15面, 1993.

「ブッシュマン（サン）」綾部恒雄監修・信濃毎日新聞社編『世界の民 光と影（下）』明石書店, pp. 74-83, 1993.

「アフリカ乾燥帯における人と自然」赤阪賢・日野舜也・宮本正興編『アフリカ研究——人・ことば・文化』京都：世界思想社, pp. 2-17, 1993.

「サン（ブッシュマン）の狩猟と動物観」『週刊朝日百科 動物たちの地球124 : 人間界の動物たち ; 4 : 養殖・狩猟・実験動物』朝日新聞社, pp. 108-109, 1993.

『最後の狩猟採集民：歴史の流れとブッシュマン』東京：どうぶつ社, 1994.

高村泰雄

「ミオンボ林のひとと農業」『遺伝』47(11) : 4-5, 1993.

“Growth and Dry Matter Production of Sugar Cane in Warm Temperate Zone of Japan, 3. Type of Sugar Cane Suitable for Forage Production.” (with H. Ehara and M. Tsuchiya) *Jap. J. Trop. Agr.*, 38(1) : 51-58, 1994.

「21世紀の作物サゴヤシ：ミニレビュー」『日本農芸化学会誌』48(4) : 186-188, 1994.

重田真義

「アリ人」綾部恒雄監修・信濃毎日新聞社編『世界の民 光と影（下）』明石書店, pp. 103-112, 1993.

「素材が元気なケニアの食事」『嗜好』No. 528 : 36-41, 1993.

「アフリカ在来作物の国際共同研究をめざして：第1回国際エンセーテ・ワークショップ」『日本熱

帯生態学会ニューズレター』No. 13 : 9-12, 1993.

“Multipurpose Utilization of Enset among the Ari in Southwestern Ethiopia.” Program & Abstracts, p. 17, International Workshop on Enset, 13-20 Dec. 1993, Addis Ababa, Ethiopia.

「科学者の発見と農民の論理——アフリカ農業のとらえかた——」井上忠治・祖田修・福井勝義編『文化の地平線——人類学からの挑戦』世界思想社, pp. 457-476, 1994.

松田素二

「都市と民族形成」(日野舜也と共著)川田順造編『改訂版アフリカ論』日本放送出版協会, pp. 87-100, 1993.

「アフリカ都市社会の形成と展開」杉本尚次・中村泰三編著『変動する現代社会の成り立ち』晃洋書房, pp. 85-100, 1993.

「地域社会のダイナミズム：アフリカの経験から」『総合的地域研究』No. 2 : 21-24, 1993.

「生きる：ことばと文化」吉田昌夫他編『よみがえるアフリカ』日本貿易振興会出版, pp. 33-50, 1993.

「アーバンライフはいかに語られるか」井上忠治・祖田修・福井勝義編『文化の地平線——人類学からの挑戦』世界思想社

[関連研究者業績]

掛谷 誠

「ミオノボ林の農耕民——その生態と社会編成」赤坂賢・日野瞬也・宮本正興編『アフリカ研究——人・ことば・文化』世界思想社, pp. 19-30, 1993.

「ベンバ族」綾部恒雄監修・信濃毎日新聞社編『世界の民 光と影(下)』明石書店, pp. 113-121, 1993.

「アフリカ研究会のころ」『増補版今西錦司全集月報』No. 7 : 8-10, 講談社, 1993.

「チテメネとファーム——ベンバ農耕の現在」『第30回日本アフリカ学会学術大会研究発表要旨』p. 8, 1993.

「アフリカの焼畑の村」『なちゅらる』p. 2, 大阪市民環境学習ルーム, 1993.

小山直樹

「マダガスカル、ベレンティにおけるワオキツネザルの順位関係」『霊長類学研究』9(3) : 259, 1993.

市川光雄

「ピグミー系狩猟採集民」綾部恒雄監修・信濃毎日新聞社編『世界の民 光と影(下)』明石書店, pp. 94-112, 1993.

「環境問題と地域研究：ザイール・イトゥリの森の例から」赤坂賢・日野瞬也・宮本正興編『アフリカ研究——人・ことば・文化』世界思想社, pp. 31-42, 1993.

「生活環境としての熱帯雨林：ムブティ・ピグミーの生活から」『創造の世界』88 : 47-65, 1993.

“Diversity and Selectivity in the Food of the Mbuti Hunter-Gatherers in Zaire.” In *Tropical Forests, People and Food : Biocultural Interactions and Applications to Development*, eds. by Hladik, C. M., et al., UNESCO, pp. 487-496, 1993.

荒木 茂

「国頭マージ、フェイチャの特性——世界の赤黄色土のなかで——」『ペドロジスト』37 : 113-125, 1993.

太田 至

「トゥルカナ」綾部恒雄監修・信濃毎日新聞社編『世界の民 光と影（下）』明石書店, pp. 84-93, 1993.

“‘Tradition vs Modernization’ Dualism in the Study of African Pastoral Societies.” *JANES Newsletter*, 1 : 2-5, 1993.

翻訳：コリン・ターンプル著『豚と精霊』どうぶつ社, 1993.

「コリン・ターンプルが実践してきた人類学と文化批判について」（訳者あとがき）コリン・ターンプル著『豚と精霊』どうぶつ社, pp. 328-342, 1993.